

# 春燈



11  
月号

# 久保田万太郎の句

友田恭助七回忌

あきくさをごつつたにつかね供へけり

句集『これやこの』昭和二十一年

万太郎は秋草を供えながら、戦地へ赴く友田恭助と面会した日のことを思い出していたのではないだろうか。

あの日（万太郎の書いたものによると）田村秋子は下戸の夫のために魔法瓶に汁粉を入れて持ってきた。「魔法瓶のなかから出るものに事を欠いて……」と万太郎、「飲めるようになって帰って来ますよ」とその時語った友田恭助は約三週間後、上海呉訟<sup>ウーソン</sup>クリークで戦死した。

渡辺鶴来

# 久保田万太郎の句

## 秋風や水に落ちたる空のいろ

句集『草の丈』昭和二十七年

前書に大正十二年浅草にて震災にあひたるあと……とある。現在もあちこちで震度三とか四とかいわれ、発生している。師は奇しくも予期せぬ地震の驚異と、悲惨さを目の当りにされ、夢であつてほしいと願つた事であろう。天地がひっくり返り「水に落ちたる空のいろ」といったのはさすが。即興的好情詩をとなえた万太郎の句である。前書がなくとも心に残る一句である。

伊谷 のり子

# 西ヶ原日記 (二四)

鈴木榮子

煎り卵新豆腐まぜてわが家の戦後  
宵の口と申うて十時夜食かな  
焼栗を食べ食べ歩みここは西安  
夜学とより勤めの後の夜学句会  
九日小袖三分砂時計の藍の砂

警備会社見回りの刻を夜業せり  
叢なすも一本立つも曼珠沙華  
平和来し御輿を昇きたり日本の漢  
祭御酒所一夜に構へ人詰めをり  
ペン胼胝の新涼ペリカンインクの染み  
べつたら市莫大小問屋の前にな  
秋気澄むえぼ鯛干物はたと小さし

坂  
鳥

木多芙美子

那須篠原風が渡るや雁が渡るや  
浅芽生野水かけてよむ道しるべ  
崩れ蛇籠水の越えゆく翁の忌  
捨案山子生涯里曲暮しかな  
衣被那須与一の男振り  
蓮の実とぶ是非なき沙汰の所替  
あざなへる吉凶いかに秋の虹  
九尾の狐太鼓をたく月の暈  
青首大根身を切る風となりにけり  
坂鳥や翁によりそふ曾良の像

〈特別作品〉  
抄

## 西の京

南  
幸子

借景の塔に日の差す名残茄子  
秋冷や大寺はなつ鐘一打  
かなかなの遠しと聴けば近くにも  
爽やかや塔の真上の一つ星  
羅生門跡のいしずゑ昼の虫  
狩衣の業平の顕つ乱れ萩  
甌穴の石の翳りも水の秋  
笕水めぐらす家並蓼の花  
月の出や紙燭に映る結跏趺坐  
時間長者亥中の月も苦とならず

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 山川好美

姑の忌や狭庭舞ひ寄る秋の蝶

秋茄子触れなば指に蒂の刺

水引の花のこぼれも知らぬ生活

風有情旧家跡地へ秋の暮

秋の蟬忽とひとこ糸終ひ風呂

○ 金子輝

行く行かぬ行かざばならぬ秋暑し

稲光オンザロックの軋みけり

独り酌むボレロ昂り来て無月

みちのくの道ひたすらに踊り来る（花笠祭）

涼新た仲見世裏の手ぬぐひ屋

○ 佐々木新

宇治菟道蓮千本三室戸寺

片陰や京の古書肆は東向き

雨しどどお池通りも山鉾も

蓑虫やとかく世間は鬼ばかり

山毛櫂の森メール手練てだれのけらつつき

○ 荻野嘉代子

アフロデイトの眼差し直ぐや花野風（ルーヴル展）

ポツダムに食みし一位の実もあまし

風の道猫に知らさる秋暑かな

戯へして義経堂よりただ秋思

道の辺の弁慶塚や露の玉

# 春燈の句

鈴木 榮子選

安曇野はいま一色に稲の秋

東京 高木 曾精

大西日浴びし農婦のめくら縮

掃苔や傘寿の夫と喜寿の妻

雲の峰崩るる音やむづかる児

墓碑銘の享年若し草の絮

望郷の捕虜の鎮魂参る秋

南溟の使者来たりけり秋の蝶

大内宿自動放水震災忌

結界の川音涼し高野山

東京 向井 芳子

曼珠沙華円かに天を仰ぎをり  
筆執りてメモを句にせむ秋灯下

新米や塩にこだはる握り飯

北満の曠野の禱り流れ星

煮焦がしの匂ひこもれり大夕立

丸ビルの新蕎麦メニュー地下食堂

千葉 島田 山流

十五夜や徑に列なす石狐

関衛る狛犬阿吽秋の風(白河関)

敗戦忌夷狄の容喙ゆるすまじ

福島 村岡 春夫

角伐られ長老威容失せにけり

敬老日身辺整理さりげなく

人柄も涼しき文を賜りぬ

東京 篠原 幸子

爽涼や瑕疵も包みて生きつづく

遊亀の画の母子のやうな日傘ゆく

ひさびさに歯にしむ酒や牧水忌

ぜんまいの緩みしごとく蟬落つる

青瓢の駒吐くこともありぬべし

福島 物江 康平

萎えし目に活を入れたる走り藪

干草を供物に加ふ畜魂祭



# 余言

鈴木 榮子

戯へして義経堂よりただ秋思

荻野嘉代子

義経は軍記ものによると兄頼朝の迫害をのがれ転々とした。

判官鬚眉の日本人にとって悲劇の主人公である。義経に平家追討の武勇談は少なく、美化され京都五条の橋の牛若丸であったり、安宅の関の判官殿として知られる。

さて戯へしては日照雨のことで考えると、日が照っていて雨が降るとは、一戯一甘えてふさげる、ざれごと等の意味を持つこの字の通りである。広辞苑に出ているので文字の読み、意味の取り方はおもしろいと思った。

解ってしまえば最もである。

文月やがらくた市に父の古書

伊藤 百江

がらくた市に父上の書を見付けたという。父上の著書なのであるか。本の背の書名も著書もまさしく父上のものである。

作者はどんな思いに駆られたことであろうか。そこに父を見た。父に逢った。その感激は察するに余りある。

父の古書といっても、読みたいと手に取った古書に父上の蔵書印でも発見したのか。私には前者に思える。

文月の季語も偶然としてもふさわしい。文月は文披月ふかひろげつきとも言う。市に父上の書物に出遭った作者はその書籍を買ったことでしょう。その時から作者の宝物です。

父上はわが娘に逢いに来て下さったのでしよう。

世の中は不思議ですね。

墓洗ふ本郷駒込祐天寺

神山 志堂

本句の本郷は喜福寺、久保田万太郎、駒込は円勝寺、成瀬桜桃子、祐天寺は目黒安住敦のお三方のお墓所である。

三先生のご墓所はそれぞれ交通の便もよく名刺ですので、句会の吟行地としてよいと思います。

取手には本多瀨子様の本願寺に敦先生の句碑があります。